

「視点を変えることでつかみとれるもの」

札幌第一高等学校 文理北進コース 1年

盛田 真也子

高校進学を機に、私は親元を離れて暮らし始めた。初めの頃は、誰にも何も言われず、好きな時に寝て、食べて、自由な生活を堪能していたが、その裏側にある孤独や責任の重さに直面することになった。「いただきます」と言っても返ってこない「はいどうぞ」という声。「行ってきます」「ただいま」と言っても静かな玄関。毎日のシンプルな言葉のやり取りが、こんなにも心を支えてくれていたのだと親元を離れて初めて気づかされた。

家族に頼りきっていた家事をしながら、新しくできた友達と遊びに行く、ご飯を買いに行く等を限られたお金でやりくりし、読みたい漫画よりも汚れていく部屋の掃除を優先する。そんな生活の中で、私はこの数ヶ月間に少しの自立心を育んできたように思える。しかし、それ以上に大きかったのは、「視点を変えて物事を見る力」が身についたことだった。これまで自分中心だった考え方が、他者の立場に立つことで、さまざまな気づきと感謝を得られるようになった。

私は将来、法律に関する職業に就きたいと考えている。自分たちの生活を守っている法律に関わることで、すべての人が満足できる社会づくりや、声を上げられない人の代弁者になりたい、正義を守る立場でありたいという思いからである。

以前は、「裁判官は主觀性が求められ、事実と証拠に基づき法の定めに従って判断を下す者」と捉えていたが、今はそうではないと感じている。例えば、万引きをした人に対して、「法を破った以上、それなりの罰が必要だ」と思うのは自然なことだ。しかし、もしかするとその人は生活に困窮し、助けを求める術もなかったのかもしれない。その家庭環境、孤立、支援が届かなかった現実を想像し、事情に目を向けることで、違った理解が生まれる。法律を扱う人には、法に従いながらも、人としての思い

やりと想像力が求められるのだと思う。そしてそこには、「視点を変えること」でしか見えないものがあるのではないだろうか。

だからこそ、私はこの南カルフォルニアでのホームステイを通して、「視点を変える力」をより深めたい。「日本という視点」から離れ、「アメリカという新しい視点」に立って物事を見てみたい。他者の目線に立ち、多様な考え方を理解する柔軟さを身につけることで、より多くの人に寄り添える人間に成長したい。その地で出会う人々と一緒に笑い、学び、成長できることを心から楽しみにしている。非母国語を使って、アメリカでの毎日を楽しみながら、素晴らしい経験を積んでいきたい。

カルフォルニアは、多様な人々が共に生きる社会があり異なる価値観が日常に溶け込んでいる場所だと聞いている。8日間という短い時間ではあるが、そのなかで異文化の中に身を置き、現地の家庭で生活する体験は、今の私にとって非常に大きな意味を持つ。

言葉や文化の違いに緊張や戸惑う場面もあるかもしれない。しかし、それもまた貴重な学びだと考えている。異なる環境にいるからこそ、日本では見えなかった価値観や、自分自身の新たな面に気づけるはずだ。そしてそれは、将来の目標に向かって進むうえで、大きな力となるだろう。